どうして私は生まれてきたの（下）

２００３年２月８日　岡本　英夫 先生

十五　課題を克服する生涯二つの場

先程の続きになりますが、人間の課題の克服は、生涯全体で勝ち取るものであるということですね。課題は、いろいろ言われるわけですが、一応、問題を簡単な形にしてみますと、「真実に遇えない」というのが人間の課題。この課題の克服は、生涯の全体にわたって勝ち取るものである。そして、この課題を克服するものが仏教なんですね。そのことをもう少し見てみたいと思います。

まず、生涯全体ということが、少し分かりにくいかもしれません。生涯とはこの場合二つの意味を持つわけです。一つは、昨日、今日、明日という、毎日の歩み、ここに大事な問題があります。私達は、毎日の歩みのところで、真実に遇えないという根本的課題を克服していく。すなわち、毎日の歩みのところで、少しずつ真実に出遇っていくということですね。

もう一つあります。それは私の一生が終わる時、それを臨終の一念と言います。臨終というのは、私の命が終わるその時に臨んでの一念。一念とは正にその瞬間です。この一念が大事なんですね。真実に遇うという言い方をすれば、少しずつ少しずつ私達は真実に出遇っていって、生涯が終わるその瞬間、真実の全てに出遇う。それを仏に成ると言います。

ですから、間違ってはいけないのはですね、普通の感覚では、臨終ということが即ち死を意味する。人の状態を生と死と分ければ、命が終わる正にその瞬間というのは、生に属するのか死に属するのか。死に属すると、考えやすいのではないでしょうか。御臨終ですと言えば、死んだと受け止める。そうすると、臨終の一念を、死んでからのことだと受け止めやすいわけです。

そうではないんでしょう。臨終の一念は生に属するんです。生の終わりです。生の最後の瞬間です。その瞬間はどちらに属しているかといえば、当然、死ではなく生に属しているわけですね。次の瞬間が死と言っていいかもしれません。ですから、人はその生の終わりで仏になる。生が終わって次の段階で仏になるとい

うことではない。そのような意味合いで、生涯全体というわけです。

ですから、生が終わらないと仏にならないんです。しかし、ただ、終わればいいのではもちろんありません。毎日の歩みが大事なんです。毎日、少しずつ真実に出遇っていくという歩みをして、人生が終わるその最後の生の時に仏なる。仏になるというのが正しく真実に出遇うということです。

十六　なぜ弟子になるのか

真実に遇うという課題の克服の場面がこの二つですね。毎日の歩みと最後の瞬間とですね。そのことを一纏めにして言われているのが、親鸞聖人の次の言葉です。

「真仏弟子と言うは、『真』の言は偽(ぎ)に對(たい)し假(け)に對するなり。『弟子』とは釈迦諸仏之弟子なり。金剛心の行人なり。この信行に由りて、必ず大涅槃を超證す可きが故に、真の佛弟子と曰ふ」

この言葉はですね、僅(わず)か三行ですが、本当によくできた言葉だと驚きます。ここに浄土真宗の全体像が表わされているような感じがします。これをいただいて見たいと思います。

そこで先ず大事なことは、「弟子とは釈迦諸仏の弟子なり」とありますが、「真の佛弟子」という表現で、私達人間の本来至るべき姿を表わしているのですね。この表現、この内容で。勿論(もちろん)救われた人間の姿でもあるわけです。私達は教えを聞いてどうなっていくのが目標なのかと言えば、それは真の佛弟子となっていくんだということなんです。

ところがどうでしょうね、真の佛弟子というものが示されると、「弟子」というのに引っ掛かりはしませんか。一つはですね、親鸞聖人は、『歎異鈔』の中で、自分は弟子を一人ももたないと言われている。ですから、弟子という言葉・概念は、念仏の教え、浄土真宗の教えには出てこないのではないかという感じがするわけです。

では、『歎異抄』で言う弟子とは、どのような位置付けで言われているかと言うと、「専修念仏のともがらの『わが弟子、ひとの弟子』といふ相論の候ふらんこと、もてのほかの子細なり」と。だから、念仏を申している人達の間で、この

人は自分の弟子だと、この人は人の弟子だという争いが起っているのは、もってのほかのことだと、「親鸞は弟子一人ももたず候。その故は、わが計らいにてひとに念仏をもをさせ候はばこそ弟子にても候はめ、ひとへに弥陀の御催にあづかりて念仏もをし候ふ人を『わが弟子』ともをすこと極めたる荒涼のことなり」と。

親鸞聖人は、自分は弟子を一人も持たないんだと。何故かと言えば、わが計らいにて、自分がその人に対して、一から色んな教えを説いたり、何なりして念仏を申すようにさせることができれば、その人を自分の弟子と言ってもいいだろう。しかし、実際はですね、その人は、ひとえに弥陀の御催にあづかって念仏を申している、阿弥陀のはたらきにあづかって、はたらきを蒙（こうむ）って念仏を申すようになったんだから、その人をわが弟子ということはまったく間違ったことだと。

もし、弟子という表現で言えば、阿弥陀のはたらきによって念仏申すようになったのだから、阿弥陀の弟子と言うべきだと言うんですね。阿弥陀の弟子という言い方も親鸞聖人はなさっておられます。阿弥陀のはたらきによって念仏申すことができるんだと、正にそのとおりですね。念仏は阿弥陀のはたらき、それを、阿弥陀を横へ置いて、親鸞が、自分が教えを説いたからこの人は念仏申すようになったんだとなれば、それはおかしい。そのような意味合いで、自分は弟子を一人ももたないんだと。こういうことですね。

十七　諸仏に対して弟子と名のる

そこで二つの事が分かってきます。親鸞聖人が弟子を持たないと、弟子を問題にしているのは、「親鸞は弟子一人ももたず」という弟子は、師の方から言った表現ですね。人に向かって、弟子と呼ぶ、これは言えないんです。師の方からこの人を弟子とは言えない。そういうところで、弟子という言葉が出ています。

ところが、念仏を申すようになったこの人の方から言えば、親鸞に対して、私はあなたの弟子ですと言うのです、どこまでも。弟子の方からは言う。だから弟子という言葉は、弟子の側にある。弟子の名のりですよね。師の方は、お前は俺の弟子だとは言わない。こういうことですね。ですから、この「真の佛弟子」というのは、弟子自身の名のりということでしょう。

ですから、弟子とは一体誰の弟子かという時に、もう一度先の言葉を見ると、「弟子とは釈迦諸仏の弟子なり」とありますね。釈迦諸仏の弟子。この言葉は大

変大事な言葉です。釈迦諸仏、釈迦と諸仏という感じですが、それでもいいんですけれど、釈迦も諸仏の一人ですから、釈迦を初めとした諸仏の弟子という意味合いでしょうか。その弟子になるんですね。

そうしますと、諸仏の弟子になるという表現はですね、そもそも諸仏とは一体何かと言えば、阿弥陀の現われなんですよ。阿弥陀が具体的な人の上に現われた、その具体的な人を諸仏と言う。だから、諸仏がそこにいれば、必ずその背後に阿弥陀がいる。言葉は諸仏の弟子と言っているけれども、諸仏と言えば、そこに阿弥陀がいる。だから、「釈迦諸仏の弟子」で阿弥陀と諸仏の弟子ということを言っている。私はお釈迦様を初めとした諸仏方の弟子です。どこまでも弟子として生きていきますということは、諸仏方の上に現われた阿弥陀にどこまでも出遇っていきます、それが私です、ということを言ってるんですね。そこのところが本当に決め手ですね。

親鸞にとってみれば、親鸞にとっての諸仏は法然上人ですね。法然上人のことを親鸞はどのように見ていたか。これはいつも申しますように、「阿弥陀如来化してこそ　本師源空としめしけれ　化縁すでにつきぬれば　浄土にかへりたまひにき」という和讃があって、阿弥陀が姿を変えて、親鸞の本師である法然上人となって、阿弥陀自身を親鸞に示された。これは見事な表現ですね。諸仏が何であるかということをよく表わしているように思います。

親鸞から見れば法然上人と言う方は、自分よりも四十歳年上で、念仏申せと教えを説いてくださる方なんですけれども、ただ、そういう所謂（いわゆる）人間法然が目の前におられるというだけでなくて、その法然上人に御会いをすることによって、親鸞は阿弥陀に出会っていくことができたんですね。そのことをなしうる存在を諸仏と言うのでしょう。諸仏に出会うかどうかによって、我々は阿弥陀に遇えるかどうかが決まる。たいへん大事な存在です。諸仏を抜きにして、阿弥陀に遇うなどできるものでないですね。

十八　師の背後を尋ねるのが師の教えに応えること

次に「本師」なんですが、本師と言うのは、本と言うのは、一番中心、大本というような意味合いでしょうけれども、具体的に言えば、その方が私の本師であるということは、私がその方を通して阿弥陀に遇えた。だから阿弥陀に遇うとい

うことが私の目的だったんですよ。その目的をその方を通して達成することができた。そこで、その方が本師になるんですね。私達はそういう意味で本師をもたなければいけないということでしょう。

そこをもう少し考えれば、諸仏善知識について、以前お話をした善財童子（ぜんざいどうじ）の物語がありますね。童子は道を求める少年ですね。善財童子が初め文殊菩薩（もんじゅぼさつ）という菩薩に出会って、仏法の教えを聞き、感動する。感動の内容は、初めて自己を知らされたと言うことでしょう。これまで自分がそんな存在とは思わなかった、深い闇、貪欲と傲慢という煩悩を知らされたというのが感動の内容です。面白いもんですよね。

それで、もっと教えを聞きたいと思ったけれども、文殊菩薩は善財童子に次の善知識を紹介して彼を訪ねよという。それで、訪ねて教えを聞く。この人がまた次の人を紹介し、このようにして、最後の五十三番目の人が弥勒菩薩（みろくぼさつ）。そこで教えを聞くわけですが、弥勒菩薩は、この童子に、お前はこれまで沢山の人を訪ねてきたけれども、お前の本当の善知識は誰か分かるかと尋ねる。それは一番最初の文殊菩薩、これがお前の善知識なんだぞと。それで、いよいよ道を求めてゆく最後の仕上げの教えを、遥々（はるばる）旅をしてきたけれども、もう一度出発点の文殊のところに帰って最後の教えを聞くのです。

これは何を言っているのか。彌勒菩薩はお前の本当の善知識は誰かと言ったけれど、本当は文殊菩薩しかいないんでしょう。善知識は。文殊菩薩の教えを聞くことによって、童子が次から次に教えを尋ねていった。尋ねていかしめたんですよ、我が善知識が。そのことを、次から次に善知識を尋ねていったというように分かりやすく説いたのではないか。我が善知識という存在は、私に次々と教えを尋ねていかしめる人なんです。

親鸞聖人の場合、仏教の歴史の一番先端の人が法然上人です。親鸞は法然に出会ったが故に、さらに、その背後を尋ねた。法然の後ろには源信がいた。源信の後ろには善導がいた。七高僧を中心とした背後の歴史があるんですね。それを親鸞聖人はと尋ねていったんです。尋ねていって、何が分かったか。その分かった世界を書物に著したのが『教行信証』ですね。正式名は『顕浄土真実教行証文類』。背後の沢山の方々が実は浄土真実、阿弥陀の本願に立った真実の教えを、この方

もこの方も説いておられた。それが五十三なんでしょうね。親鸞聖人が、法然上人に出会い、文字どおり文殊菩薩ですね、そして五十三人の求道の旅をしたようなものですね。ここの道理は同じという感じがします。善財童子の歩みもね、親鸞聖人の歩みも。

私たちもそうだと思いますね。私がよき人に出会う。その方は、その背後の世界を知っている。背後を尋ねさせる力がその方にあるんです。背後を尋ねること、それがその方が私に説いてくれた教えなんですね。ですから、ただ教えを聞いたのが教えを聞いたということではない。その方の背後を尋ねていくということが、その方から教えを聞いたということになるわけです。

親鸞聖人が尋ねた背後の世界がコンパクトに表現されているのが、『歎異抄』の第二章ですね。聖人が尋ねられた仏教の歴史、法然上人の背後にある歴史ですね。

「弥陀の本願まことにおはしまさば釈尊の説教虚言なるべからず　佛説まことにおはしまさば善導の御釈虚言したまふべからず　善導の御釈まことならば法然の仰そらごとならんや　法然の仰まことならば親鸞がもをす旨またもて虚しかるべからず候か」

このようにして伝わってきたんですね。法然上人の背後に、善導がいた。善導大師の背後にお釈迦様がいた。これらの方々が皆、阿弥陀の本願によるがゆえに真実であると言える教えを顕わしていたんだと。何故それができたかと言えば、阿弥陀の本願のはたらきを皆が蒙っていたからなんだと。そして自分もそうなんだと。一番最初に弥陀の本願まことにおはしますということが根本にあって、それ故に釈尊の説教虚言なるべからず。善導の御釈虚言したもうべからずと。このように伝わってきたというわけですね。

このようにして私達は、具体的な諸仏善知識に出会って、一つはその背後の教えの世界を知り、そして、一番根源の阿弥陀に出会ってゆく。そういうところに釈迦諸仏の弟子という、お釈迦様を初めとした諸仏方の弟子なんだと。諸仏方は私を弟子とは言われないでしょうけれども、弟子である私からすれば、どこまでも諸仏の弟子なんです。弟子として生きるということが本願のはたらきを蒙って生きること。本願のはたらきを表わしている諸仏方を頂いて生きるということ。この姿勢が私の毎日の歩みを貫く姿勢ですね。そういうことが先ず一つ言われて

います。

十九　念仏申し、念仏に行じられて生きる

先ほどの続きですが「金剛心の行人なり」。釈迦諸仏の弟子として歩んでいく者が金剛心の行人と。これはなかなかいい押さえですね。金剛心というのは、如来より賜った信心を金剛心と言います。金剛とは、強いということで、次のような表現もあります。「譬(たと)えば金剛は百千劫に於て水中に處して爛壊せず、亦(また)異変無きが如し」。百千劫と言う長い長い間、水の中にこの金剛をおいていても、腐ったりしない、どんな変化もしない。「菩提之心」これが信心ですね、この信心も亦このようなものであって、「無量劫に於て生死の中に處するに、諸の煩悩の業断滅すること能はず、亦損減無し」と。信心を長い長い間、生死の迷いの世界、煩悩の世界の中にずっとおいていても、諸々の煩悩のはたらきによって、信心が断滅したり、損なわれたりしない。こういう表現があります。それ程に阿弥陀から賜った信心が強い、煩悩に負けないんですね。

その金剛心の行人、行人というのがなかなかの表現ですね。私達は、何かを行じて生きていく。だから、生きることが何かを行ずるということ。そこで、何を行ずるかが問題ですね。その場合に、金剛心という、如来より賜った信心の行、信心がはたらくというのが行、この行で生きていく。信心に基づいた行とは何か。これが念仏申すことですね。従って行人というのは、念仏申して生きる人。金剛心の行人とは、信心念仏の人ですね。

これは先生がよく仰っておられた鯉のぼりの譬えで言いますと、鯉のぼりは初め風がない時はだらっと下がっている、しかし、風がやってくると、空を元気よく泳ぐというわけですね。なぜ泳ぐかと言えば、風が口から入って、胴体の中を通って、シッポから出ていく。要するに風がサーッとと通るから泳ぐ。風が通ることで、風の力が鯉のぼりに影響を与えて泳ぐ。下へ下がらずに泳ぐわけです。

入ってくる風、これが南無阿弥陀仏、阿弥陀の本願の風ですね。それを行と言います。行が私の中を通る、その時に私に力を与える。私の中を通る行が信、信心の力によって、私が生き生きと生きる。そして、私の外に出るのが、南無阿弥陀仏という念仏。信心によって、生かされて、南無阿弥陀仏と念仏申すところに、私が救われているということの証明がある。南無阿弥陀仏によって生かされて生

きる、様々な私の現実をじっと受け止め、ついにナンマンダブツとなる。この信心念仏の歩みが私達の毎日の歩みです。

二十　遇うべき真実を仏教は真正面に説く

もう一つ大事なことは、今、生涯全体で私の課題を克服し、勝ち取るということなんですが、次の言葉をみましょう。「この信行に由りて必ず大涅槃を超證す可きが故に、真の佛弟子と曰う」と。信行、即ち金剛心の行人の上に成就した信心念仏ですね。信心念仏という、阿弥陀のはたらきをいただいて、毎日の新たに展開する自己を受け止め、ナンマンダブツと自己を生きることができる。このことに由って、「由（よ）りて」というのは、理由ですね。毎日の信心念仏で生きる生活ということが理由になって、必ず大涅槃を超證す。

大涅槃という言葉で表わされているのが、人間がこれに出遇うことによって人間となることができるという真実のことなのです。仏教というのは、真実を真正面に据えて説くわけです。勇気があると言えば大変な勇気ですね。このように言えるのは。普通であれば、真実とは言うけれども、一応言うだけであって、本当に真実に出会うなどあり得ないという感じで考えるかもしれない。しかし、真実が遂に明らかにされた。そしてそれに出遇って、本当に懺悔と感謝と讃嘆と願生に生きた人が次々と現れた。そこに仏教がある。仏教とはそういうものなのでしょう。

人間は、真実に遇わなければね、救われない。真実に遇う必要がなければ、真実という途方も無いものは放っていていいかもしれないけれど、真実に遇わないと人間は救われない。それは同時に人間が明らかになったということ。人間とは何か。真実とは何か。それを言い切った。いや、言い切ることができたところに仏教は生まれた。だから物凄く勇気がある。その勇気はどこからくるか。人間とは何かを明らかに見たからでしょうね。だから、逃げないんですよ。真実なんてよく分かりませんと逃げないんです。これを明らかにしないとこの私が救われないんですということがあるんですね。

真実、それを今大涅槃と言う。この大涅槃と言われる真実を必ず、超證す、証明するんですが、その証明の仕方がいろいろあります。仏教の歴史上、様々に考えられた。超證の「超」は、今、直ちにという意味です。聖人は次のように言わ

れます。

「然るに菩提心に就いて二種有り。一には竪、二には横なり。又竪に就いて復二種有り。一には竪超、二には竪出なり・・・亦横に就いて二種在り。一には横超、二には横出なり」

親鸞聖人が全仏教を同じ土俵の上で明らかにされます。「竪」は人間の力。「横」は如来の力。人間の力で救われようとするのと、如来の力で救われようとするのと、ここに大きく二つに分けられて、それぞれに超と出のあり方があります。「超」が今直ちに、「出」が時間をかけてですね。ここに四つの救いのあり方というか、実際救われるんではないんですけれども、救いの考え方があります。

その中、本当に救いがあり得るのは、「横超」です。他はあり得ないんです。「竪超」は人間の力で直ちに。そうはいきません。「竪出」は人間の力で時間をかけて。不実の人間はいくら時間をかけても自分の力では救われません。「横出」は如来の力で時間をかけて。如来の力によれば時間はかからない。それがかかるとすれば、人間の側に何か如来の意に背くことが起こっているということです。本当の救いは阿弥陀の本願のはたらきを受けて、直ちに救われる。これしかない。「横超」しかない。

そういうわけで今直ちにというのはですね、直ちにと言っても現実的には時間の幅があって、私のこの人生に於いてということです。逆に直ちにでない、時間がかかると言うのは、想像を絶することなんですけれども、死んでその先き、先き、次の生、またさらに次の生と、そういう次元の話ですね。

二十一　我が内に真の仏弟子ならざるものを照らされていく

信心念仏で歩んでいくことによって、遂に我が人生の最後の瞬間において、最後の生において真実そのものに出遇ってゆくんだと。即ち、人間は真実に遇うことによって救われていくということが、ここで完結するわけです。ここで完結するというのは、それまでの毎日の歩みが信心念仏の歩み、それが正定聚の歩み。正定聚の歩みをすることによって遂にここで大涅槃を超證して、佛になる。

そういう意味合いで生涯の全体で、真実に背いている私が遂に真実に出遇っていく。真実に遇えないという問題を克服していくんですね。ですから、真実に背いているが故に真実に出遇うことが出できないこの我が身というものが、同時に

宝なんですね。正しくこの我が身という場が真実に出遇っていく道場なんですよ。この我が身という道場を歩んでいくわけです。

その歩んでいく内容が、一口に言って信心念仏なんですが、ただ、念仏申しておればいいかと言うと、やはりそうではない。「真佛弟子と言ふは、真の言は偽に対し假に対するなり。」　これがまた、大事なことですね。偽に対し、假に対するということは、この「対し」という言い方が独特ですね。これはただ真というのは、偽と対象されるもの、要するに偽ではないもの、假ではないものという意味ではないんです。

そういう分類をしているのではなくて、真の佛弟子という意味は、我が内に、偽の佛弟子である自己、假の佛弟子である自己を見ていく。我が内に知らされてゆく。私は偽の佛弟子であります、假の佛弟子でありますと、そういう私自身を知らされて歩む、これが信心の道の歩み、正定聚の歩みですね。

偽の佛弟子というのは、これはもうまったく佛弟子とは全然言えない、要するに仏法を無視して、自分の考えで自分は救われるんだと思っている、そういう思いが我が内にあることを知らされていくんですね、そう知らされるのが真の佛弟子であるということなんです。又、假の仏弟子というのは、南無阿弥陀仏に出遇うことができた、南無阿弥陀仏が大事だと分かった。けれども、依然として、それを自分が私有化していく、自分の力で念仏を申しておるんだと思っている。念仏は阿弥陀からのはたらきだけれども、そのはたらきを光で照らされるがごとく蒙るのではなくて、自分が偉いから立派だから念仏申すんだと思っているような、そういう念仏にしてしまうんですよ。そういう姿を假の佛弟子と言う。

そのような偽の思い、假の思いが私の中にありますということを限りなく我が内に知らされていくところに、真の佛弟子がある。だから偽の佛弟子、假の佛弟子を卒業して真の佛弟子になりましたというのではないんですね。真の佛弟子は、我が内に偽と假の佛弟子であることを知らされる歩みをし抜くところにあるんです。これが、親鸞聖人が見い出した浄土真宗の世界ですね。

生涯、我が内に真ならざるものを、教えによって照らし出されていくのが、煩悩の存在として生きていく道なのです。これしか私達にはできない。これより上でも下でもないんですね。煩悩を卒業して何か真実ばっかりになりたいような感じがする。そうはいかんですよ。私達において、もし真実が成就するとすれば、

生涯の最後まで真実でない自己を知らされていくということですね。そういう歩みをするが故に、最後の瞬間において、遂に佛になることができる。これは本当に人間の常識とは真っ向から反するようなものです。

人間の常識は、途中、いろいろ辛いことがあってもね、最後は楽になるというか、最後は救われるというか、それを目指しているのではないかと思います。常識と言っても、蓋(ふた)を剥(は)げば煩悩ですから、この辺りまではしんどいけれど、最後は楽になると、最後は真実になると、そんなことはないですよ。煩悩は無くならないんですからね、だから、どこまでも煩悩の存在として、阿弥陀の本願をいただいて、念仏申して生き抜く、その一生涯が正定聚なんです。その最後、人生が終わる時に佛になる。途中で佛にはならない。途中は正定聚(しょうじょうじゅ)、それが信心念仏の歩み。

ですから、私達の喜びというか、遂に人間に起る願いというのは、どこまでもこの本願の智慧によって、我が真実ならざるものを照らし抜かれたいという願いです。こんな願いは普通考えても出てこない。真実になりたいという願いは、一応あるとしても、真実でない自己を知らされたい、生涯の最後まで知らされたいという願いは起こるものではないでしょう。これが親鸞聖人の三願転入ですね。親鸞聖人にはそういう願いが起ったわけです。煩悩の存在としての、唯一の、しかも堂々たる生き方と言わざるを得ないでしょう。（終わり）